

8-4 巷野悟郎氏の考察

ここでは、かつて巷野悟郎研究員が現代の保育所における低年齢児保育の考察と展望として乳幼児の保育について注意深く執筆された章を抜粋して参考に供したい。

平成19年度 保育所における低年齢児の保育に関する調査研究報告書から

IV. 総合的考察と展望

巷野悟郎研究員

子どもは人間として成長・発達する素質を有して生まれてくる。しかしそれには条件があって、その素質が未来の方向へ向かって成長・発達させるだろう環境が必要である。

からだの成長にとって必要なのは適切な栄養と環境温度であり、感染や事故の予防などである。心やからだの発達には先輩である成人が必要であり、なかでも親であり、胎児期を育んだ母親の存在が第一にあげられる。そして年齢相応な子ども達の集団という環境と生活の中での身近な自然環境が必要である。

更に成熟していくからだの仕組みには、段階があることも理解しておく必要がある。第一段階は0歳・1歳・2歳である。この時期は子宮内の胎児期から人間の生活する環境になじむときであり、同時にからだの基本的な働きがほぼ成熟していくときである。生まれたとき何もできなかった新生児は、この3年間に二本足で歩くまでになって行動が広がると同時に、言葉の発達で人との関係が始まる。食事も自分で摂り排泄もほぼ自立する。

この3年間は、それからあとの長い一生にとって必要なあらゆる働きが準備されると言っても過言でない。しかもその頃の事は私たちの記憶にない。

胎児期に続くこの3年間は人間の基礎が固まるときであり、これに続く3歳・4歳には自分という存在が自覚されて、集団生活のなかで自分で考えて行動しながら、夫々の人生が始まると整理されよう。幼稚園教育が3歳から始まるのも、永い間の経験からつくられた制度であろう。幼保一元化を考えると、この基本を無視することはできない。

以上が胎児期から始まる乳幼児の発達の考え方で、これは医学的にも理解されることなので、保育所保育を考えると参考となろう。今回の研究目的は「保育所における低年齢児の保育」に関することで、まずは実際の保育内容についての調査項目を中心としてすめられ、各研究者が分担している。私の担当は「総合的考察と展望」ということで、現在の保育内容における問題点を選択し、これに対して回答者からの考えを自由記載して頂いているので、これらを参考として述べることにする。

低年齢児保育について

保育所（園）が対象とする園児は産休明け（労働基準法では、妊娠と申請があった場合は出産前6週間と、出産後8週間を経過しない女子を就労させてはいけない）から小学校

入学前までの乳幼児である。児童福祉法では、乳児（満1歳未満）と幼児（1歳から就学前まで）に分類されている。普通に0・1・2歳児を3歳未満児と呼ぶことがある。更に実際の保育では乳児保育或いは0歳児保育といって、毎年4月1日の段階で満1歳未満の乳児を対象として受け入れている。近年は親からの要望が多くなり、0歳児保育を行う園が多くなってきている。しかし必ずしも産休明けの生後57日からでなく、生後半年からとか10ヶ月からなどというように、施設によって異なることは本調査からもわかる。

また0歳児保育というときは、4月の段階で生後57日から1歳未満の乳児も、間もなく1歳を過ぎる幼児もいるから、ここで低年齢児保育を乳児保育としたとき、実際には4月を過ぎる段階で1歳を超える幼児も含まれてくるということを理解しておく必要がある。

即ち低年齢児保育・乳児保育といっても、実際の保育では1歳台の幼児保育も含まれる。

これというのも乳児・幼児は児童福祉法で定義されているからである。更に4月の段階で乳児保育を担当したとき、それからの1年間には担当した乳児が1歳過ぎの幼児になっていることを、念頭におくようにする。実際には生後3年間（0・1・2歳）と3歳以上とではからだと心の発達には大きな差がある。経験的にも昔から3歳になると教育がはじめられる段階になり、幼稚園教育が学校教育の一部となる。この段階を基準としたとき、0・1・2歳はそこに達していないということから「未満児」という通称があるのではないかと考える。本来の3歳から5歳の集団保育に対して未満であり、時代の流れのなかで更に年齢の低い2歳児・1歳児・0歳児と低年齢児保育となり、0歳児とそれに続く1歳児が、まとめた乳児保育となる。

この低年齢児（0・1・2歳児）は3歳以後とは画然と区別できる時期である。保育に当たっては低年齢児に続く3歳以後の発育に目を向けてというより、胎内にあったときからこの世に生まれてきたばかりという状態をもとにして、手をかけることが大切である。

どう育てるか、保育するかという考え方よりも、未熟な乳児が健康に発育していくためには、何をしたらよいかである。対象とする園児が低年齢であるほど、この考え方を基礎に保育をすすめていくようにしたい。その結果として3歳に向けて乳児のからだは成長し、心が発達していく。次に低年齢児の保育に当たっては原点となる子宮内の胎児がどう育ってきたか整理しておこう。

まずは環境は一定であったということである――

妊娠すると子宮内の胎芽から胎児へと発育して、やがて3kgの新生児となって生まれるまで、子宮内環境は一定温度であった。それは妊婦の体温と同じ温度で、四季を通じて一定。更に胎児が成長するための栄養は、妊婦の食事のなかの必要な栄養素が臍の緒の血管を通じて四六時中胎児に補給されていた。環境の温度が一定で完全な栄養が与えられていて、しかも羊水の中だから事故もなく胎児はすくすく育ち、280日間（約9ヶ月間）で3kgになって生まれてくる。生まれた途端に新生児は自分で呼吸し、自分で乳を飲み、体温を調節しなければならない。それに対して乳児は自分から何もできないから泣くだけ。空腹になれば泣き、からだがか冷えて寒ければ泣き、暑ければ泣き、どこか痛ければ泣く。そのとき

母親は乳を飲ませたり衣服を調節したり、からだを調べて異常がないかどうか心配をする。産休明けの2～3ヶ月はまだまだこのような時期だから乳児の泣きをたよりに手をかけ続ける。これは24時間続くから、夜中も同じである。家庭でも保育所でも乳児の泣きに注意して、その原因を判断して手をかけるのである。このようなことに対して日本では、子育て・育児・保育という言葉が普通に使われるが、英語ではそのような表現でなく、ケアcareが使われる。ケアを英和辞典で調べると、注意する、気にかける、保護、看護、世話などをするとあって、保育や育児という言葉はない。

ケアすることで乳児は安心し、安らかな気持ちになるから、そのときに手をかけてくれた母親を近くに感じ安心し好きな人となり、信頼することを覚えて人間関係が育っていく。

このような関係で乳児は育ち、半年頃になると母と他の人を区別して、“人見知り”が始まる。その後乳児のからだの動きや声に応じているうちに、ひとり歩きへと発達し言葉を覚えるというように、人間にとって必要な運動機能や、心が芽生えていく。

低年齢児保育は、乳児にとっては人生の始まりで、ケアされることでからだと心が発達し、人を信頼することを覚えていく。それにはなんと言っても親と子のふれ合い、保育所にあつては担当する保育士と乳幼児とのふれ合い、そして会話である。それには保育士のきめ細かな心づかいが必要で、ふれ合う時間が十分に欲しい。今は保育士一人で0歳児は3人、1歳・2歳児は6人とされているが、これでは1対1の人間関係が薄くなる。低年齢児ほど乳児の要求に対する対応が必要で、これは生命に関係することでもある。

今回のアンケート項目「低年齢児保育に対する考え」からも基本的な意見が述べられている。「個別的な愛着形成が必要」「愛情・信頼関係・人間尊重の保育」「親との連携」「産休明けは1：1の担当が必要」「途中のパート採用は資質が関係し、保育に影響する」「家庭と同じゆったりした環境が必要」「信頼関係」「1歳までは母親のところで」などとある。そして「自分の子どももこの園でと思うようなよい保育を目指したい」という言葉もあつたことを付け加えておく。

長時間保育について

保育所保育は基本的には8時間の開園が普通であるが、近年は一日の半分の12時間あるいはそれ以上の開園が殆どである。それに応じて12時間以上在園する低年齢児も増加してきている。朝7時から夜19時以降までの在園だと、それからあと帰宅して食事、入浴を含めての親子の触れ合う時間は僅かである。しかも結果的には夜更かしで、朝目覚めてから登園するまでの時間も短いから、朝食抜きということもある。

全体に長時間保育は親子の触れ合う時間が短いということで、今回の調査でも「これでよいだろうか」という感想文が多い。ことに「低年齢児の長時間保育を希望する保護者が多いということは如何なものか」ともある。「止むを得ず預かっているが、その間子どもは淋しい思いをしている」「長時間集団の中で子どもは疲れていてストレスがたまる。情緒不安」という声が上がっている。更にこのような長時間の親子の分離の結果を「近年子どもの事件・事故が多発している。現に身内である親子のいたましい事件が起こっている、

長時間保育は止むを得ないことではあるが、淋しい思いをする子どもの思いを感じとらなければ……将来を考えなければ……」という言葉もある。そして「生まれてから大学卒業までの年月の中で、保育園児が一番長く親から離れて生活しているのではなかろうか」と感想を述べているものもいる。

人は生物として地球上に生まれてきた。その地球は太陽に対して自転しているから昼と夜が訪れる。それは明と暗の世界である。その明の時間に人は食物を獲得するために闘争し、暗い夜に休む。これが生活リズムで、昼の時にエネルギーを獲得して健康を保ち、そのための生活で心が育ち文化を形成してきた。これを子どもに置き換えると、昼間は人とのふれ合いが必要で、ことに自分と最も親密な親との時間で人間同士の心の結びつきを学び、これが将来に向けて集団生活を形成する基礎力となる。園児は子ども仲間との遊びで多くのことを身につけていくから、家庭ばかりでなく保育園での生活時間は大切であることは誰でも認めている。しかしこれが長時間となると限られた一日だから当然の結果、家庭での親との触れ合う時間が短縮する。大切な親と子のふれ合いが少なくなることを憂えるのである。これを一番よく理解しているのが現場の保育士である。アンケートの声をまとめると、長時間保育の問題点は次のように整理されよう。「毎日我が家から離れて長時間、長年月にわたって限られた環境で多人数の友だちとの生活が、子ども達の心の発達にとって如何なものか。その結果、親と子のふれ合いの時間の短縮は子どもの心の安定にどうだろうか」と。多くの人達がこのような考え方があっても、現実には長時間保育が行われているのであるから、その欠点を埋め合わせるにはどうしたらよいかということを考えなければならない。これについては各保育所で努力していることであるが、次の二点を挙げておきたい。

そのひとつが生活リズムである――

健康を確保するためには、成長期の子どもの生活を昼と夜の波にのせていく保育が必要である。その点から昼は、食と遊びが中心であることが理解されよう。なかでも食は生命にかかわることであると同時に、そのときの空腹の満足が心を育て活動の原動力となるので、乳児保育では殊のほか配慮が必要である。第一には授乳時間である。

離乳食が始まるまでは、乳汁のみの哺乳であるが、これには自律授乳がすすめられている。乳児が空腹で泣いたときはいつでも飲みただけ飲ませるのである。空腹のときなら乳児はいくらでも喜んで飲む。やがて満腹したとき満足して乳首を離れたとき、身近の保育士（家庭では母親）の存在を感じる。そして毎回の授乳を重ねるうちに保育士（母親）が身近なものとなり、やがて心が結ばれ、乳児はその人の存在を信じるようになる。乳児の人としての心の育ちの第一歩である。離乳食前の長時間保育ではこの自律授乳の機会が多いので保育のなかの重点項目である。（厚労省が平成19年3月に提示した「授乳・離乳食ガイド」参照）

次いで離乳食がすすむにつれて1日3回食となったとき、この食事は昼間の行動であるということの基本として、保育に取り組む必要がある。それには食は人類生存にとっての

基本である。昼間の活動の一部であるということに始まる。そこで長時間保育となったときの3回目の夕食は保育園の保育内容の一部として取り上げたい。在園時間が午後7時・8時となると、多くの例で帰宅してからの夕食となり、これが夜更かしへ通じて、一日の生活リズムが乱れてしまう。そこで夕食を一般の家庭での夕食時間である5～7時頃に園で提供して欲しいと思う。この3回目の夕食を一日の3回の食のなかに位置づけたとき、これが生活リズムの起点となってすべてが順調に進むであろう。この状態で帰宅したとき、すでに空腹は満たされているから昼の疲れで間もなく就眠し、その結果は翌朝の早起きへと続く。ある保育園では夕食の提供の結果が見事に早寝早起きで、しかも朝の排便という習慣がついたという。遅く帰宅する父親にとっては、淋しいというおまけがついたようであるが、3歳頃までに早寝早起きの習慣をつけることがすすめられているとき、保育所での配慮が望まれる。もうひとつが家庭の子育てとの連携である――

上記の食生活にしてもおむつの交換にしても、抱っこにしても、一人ひとりの乳児にとってみな違う。受け持ちの乳児の保育は常にその家庭での子育てと相通ずるものがなければ、乳児の心が安定しない。0・1・2歳児の子どもとからだの発育は、将来の子どもを育っていく原点となっていくことを理解して、一人ひとりに対していけば長時間保育のなかにもそれなりに何かよいことを発見していくことがあるのではないかと思う。

騒音について

保育園は多数の乳幼児の集団の生活の場だから、そこから発する音の量は大きい。その種類は園児達の声・遊びに伴う足の音・物の触れ合う音・保育士の声など様々で、それは建物の内外で主に昼間に発生する。このような毎日の音になれてしまえばそれを騒音として感じなくなるけれど、これが園児達の成育にどうかかわるか考えたとき問題がある。一般に園児は年齢別に居室があって、そこが一日の生活の中心となって、遊びの場だけでなく食事や睡眠の場として使用される。そして一日のなかで集団の時間のこともあるし、各人の自由な時間もある。このようなときの遊びもときにひとりだけで静かな時を持つのがよいこともあるし、数人の仲間たちと遊びたいこともある。しかし同室に多人数の仲間ではこのようなことは必ずしも求められないで、落ちつきなく時間が過ぎてしまうことが多いのではなからうか。おとなでも疲れたときはひとりで静かにしたいことがあるし、好きな音楽を聞きたいであろう。このようなとき絶えず無意味な騒音では気持ちが休まらない。このような時間が続くとき私たちは疲れも癒されず、これが蓄積したとき精神的あるいは身体的な不調を来すことを、多くの人を経験している。保育園の園児の中には、0歳から入学するまでの6年間にわたって、毎日朝から夕方まで同じ環境で騒音の中にあるわけだから、これがことに心の発達に影響することは十分に考えられる。ことに情緒の発達はいかがであろうか。保育園内の音についての研究報告も散見する。埼玉大学教育学部幼児教育講座の志村洋子教授は保育室の「音をデザインする」と題して保育室内の音を測定している（保育と保健 平成16年7月・10巻2号・72～73頁）ので引用させてい

ただ、測定した平均的な保育室内の音量を3歳児室についてみると、午後の午睡時間帯である12時30分から3時頃までは50～60dB（デシベル—音圧のレベル）であり、登園後から降園までは70～85dBの範囲で推移している。時には瞬間的に最大値が90dBを超える測定値もみられた。この結果は「騒々しい」といえる音量であり、一般的に会話が十分に成り立つと言われる40～60dB（静かな事務所内）を大きく上回っている」とある。参考までに40～60dBは事務所内の音量、80～90dBは電車の中や工場の音量。

100dBは電車の通るガード下で、正常耳で聞きやすい会話音は50～60dB。保育室内の騒音についてのアンケートでもかなり気配りしていることが感じられる。「園内の音を騒音とは考えていない」という意見もあるけれど、大方は「子どもの元気な声が飛びかっているけれど静かな雰囲気の中で子どもも落ち着く。騒音の中では子ども自身も落ち着きがなく、人の話に耳をかさない。」「普通の会話の大きさを会話できる環境を目指している」「保育に関わる保育士による騒音（大きな声の私語や声かけ）が気になる」「保育者の声が大きいのが心配、音楽や自然の音以外はできるだけさけるようにしている」

スウェーデンの保育室では家庭の室内を再現する姿勢が至るところに見られ、保育室は家庭を模したいくつかの部屋から構成されているという。大きめの部屋：中心的活动を行い、昼寝もする。やや大きい部屋：自由に遊ぶ部屋、食事もする。やや小さい部屋：音楽活動や絵画制作をする専門の部屋。

なおスウェーデンのある保育所では、室内に音量計が設置されていて、一定以上の音量になると、光で示されるところがあると聞く。豊かな心を育てるために保育所の音環境を考えたい。

午睡について

人は生物として昼の活動（摂食・活動・遊びなど）と夜の睡眠をくり返している。これが生活リズムの原型で、からだの生理もそのような仕組みで活動している。なかでも夜間の睡眠は昼の活動にとって必要で、ことに成長の著しい乳幼児にとっては夜間だけでは不足なので昼間も眠る。これが普通に言われる「昼寝」である。そして成長とともに昼寝の時間や回数は少なくなり、幼児期後半にはそれも必要なくなって睡眠は夜間に集中する。

昼間の保育を中心とする保育所保育の保育指針でも、在園中の睡眠については月齢を追って記載されている。要旨は低年齢児ほど昼の睡眠には個人差があるので、「眠いときには安心して眠れるように配慮する」と表現されていて、3歳児の保育内容からは「午睡など適切な休息をとらせ、心身の疲れを癒して、集団生活による緊張を緩和する」とあり、「午睡」という表現がでてくる。午睡は昼間に眠る「ひるね」のことで、一般的には乳幼児の成長とともに少なくなる昼間の眠りがこの時刻に集中したのである。

乳幼児の昼の眠りの平均回数は、生後3～4ヶ月頃までは数回で、個人差があり、半年を過ぎる頃から午前・午後の2回、1～2歳頃には個人差があって、2回から1回、3歳を過ぎる頃には午後の1回が多くなり、4～5歳以後は昼の眠りは消失していく。眠りは本来夜間であり、自然界の動物と同じように夜7～9時頃には眠りにつくようからだが仕

組まれているので、それまでの昼間の断続的な眠りは縦続的なものと考えて、これを積極的にすすめる保育は如何なものであろうか。本人が必要とするなら園児はどのような時でも眠るであろう。しかしその眠りを助けるために部屋を暗くしたり、静かにすれば園児は夜間の睡眠を補うであろう以上に、いわゆる「寝すぎる」かもしれない。本来自然界の動物にとって昼間の眠りは無防備な自分の弱点を見せることであるから、いつでも起きられる態勢である。深い眠りでないことを考えると、睡眠時の環境は、普段の保育園の騒音環境であってよいし、昼間の明るさでよいと考える。個人差があるけれど、このような普通の昼間の環境の中でも眠りたいときに一時的に眠るのを昼寝と考えたい。このようなことを経験しながら昼の眠りは次第に短くなり、夜間に集中していく。しかし午前中の明るい中での遊びは、殆どの園児にとって疲れであろう。だから昼食後は休むことが必要。おとなも労働基準法で昼の休息が定まっているのだから、園児にも昼休みが必要であろう。その時間眠る子どももいる。ある子は静かに仲間と遊ぶであろう。全員を眠らせるのではなく、一人ひとりの選択にまかせる昼休みでなかろうか。諸外国ではこのような形での昼休みが多いと聞く。そのためには職員の人数も増えるかもしれないが、これが保育指針にもあるように、一人ひとりの子どもの発達を考える保育の出発ではないかと思う。

近年朝寝して登園し、そのために元気がないので午前中の眠りを「午前睡」と称してすすめているところがあるという。そのため午後は元気に遊ぶというのであるが、これは本末転倒で、本来の生活リズムに反することである。午前中の明るさこそ、遊ぶ子どもにとって必要な環境である。保護者と話し合って早寝の生活を復活させ、早起きで午前睡を考えなおして欲しいと思う。昼寝についてのアンケートでは、保育士の職務との関係で一斉の午睡の考え方には心がゆれ動いている感じである。「午睡を強制することではないが、長時間保育の子が多いため1日の中で休む時間が必要」と常識的な回答が多いが、「午睡が夜の眠りに影響しないように、2時間以内がよい」と夜の眠りのことを考えての内容がある。しかし「前年までは年長児までしていたが、今年から年長児の午睡を中止した。その結果、夕方家に帰ってから夜ご飯を食べず、風呂に入らず寝てしまう子がいる。家に祖父母がいないので、母親だけでは親子の触れ合う時間がない」と心を痛めている回答もある。子どもの1日の運動量や食事内容、体重等で必要とする睡眠時間には個人差がある。

また長時間保育で在宅時間が短いと一日の保育内容がそのまま家庭の親子との関係にまで波及してくることが、ひしひしと感じられる。だからこそ一人ひとりの保育ということになるけれど、これこそ昼間の眠りという生理的な現象が問題のとき、保育所と家庭との話し合いが必要である。

病児保育について

保育所保育の条件は時代とともに大きく変り、近年は病児・病後児までが対象となってきている。子育て支援が幅広く解釈されてきた結果であろう。しかし育っていく子どもの立場で考えたとき、そこには常に親の存在が求められている。ことに0・1・2歳児はからだの基本的なものが育っていき、それは常に子どもに向けた目が必要だからである。

とくに子どもが体調不良や、病気ときはすべてを包含して接してくれる母親の存在が必要で、それが治癒に大きな役割を果たすことが知られている。

「病気の時こそ」母親の存在が必要なのに、今の社会態勢では、なかなかそれが出来ないところに問題がある。育児休業・看護休暇が望まれるが、今の時代は母親の就労が優先されている。厚労省も近頃ようやく「仕事と生活のバランス」に目が向けられてきたようである。しかし一方ではなお保育所での病児・病後児保育は必要な段階にあるのであろう。アンケートの結果を見ても、多くの保育所が「病気の時こそ家庭で」という気持ちを持ちながら、親に代わって病児・病後児保育に努力している様子が伺える。いつの日か病児が家庭へ帰れる日があるであろうという希望をもちながら、続けて保育所での気持ちを紹介させていただく。

「男女共同参画社会といわれる昨今において、就労する女性が更に増加。子どもが体調不良と連絡をしても、すぐに迎えに来ることのむずかしいことが多い。そのため病児・病後児保育とあえて言わずともやっている」多くの保育士さんの心のうちであろう。しかし親に対しての訴えも多い「なんでも預かれる場所があればよいでなく、親子の絆を大切にすることを忘れてはならない」「休日保育に問題がある。皆が（一般が）休みの時に幼子（おきなご）が休む暇もなく、親から離れて集団保育生活で過ごすことが果たして……と考えてしまう。悲しい顔をしている子どもの立場を考えて欲しい」

更に具体的に訴えている人もいる。「診察してもらったのが一日遅れたために治るのに3日かかった・親は仕事を余分に休むことになる。子どもの病気で親が1日休めば翌日から仕事に行ける例が多い。真剣に子どもの病気のことを考えてもらいたい。熱があるのに登園するのは止めてほしい」と。

またはっきりと「病気の時こそ親が側にいて欲しいと思う。だから病児保育はあまり望まない」と心の痛みを持って訴えている人もいる。現状の解決策として「就労しているとなかなか休めない。受け入れ可能な施設と設備を希望する」「病気の時こそ小児科や病院そして国全体で取り組んで欲しい」と訴えているものが多い。将来に向けては「体調が悪いときには保護者が迎えにこられる社会制度が必要」というのが大方の声であった。

親と子について

今回の低年齢児の保育に関する調査で、各園の保育状況が浮き彫りにされたので、これからの保育所保育の参考になることが多いであろう。自由記載欄については、低年齢児（0～2歳）の保育で従来から関心の多い項目を取り上げて、現場の人達がどのようなお考えであるかを書いていただいた。「低年齢児」の「集団保育」・「保育所という一定の場所」「長時間保育」「保育所内の騒音環境」、そして一斉の「午睡」や「病児・病後児保育」という問題である。これらはこれからの保育のあり方について、参考となることばかりである。そして最後が「現在の親子関係」についての自由記載である。（よいところ、困ったところ、何か気付いたこと等）、今の親は子育てについてどのような考えをもっているか、そして日常の親子関係を保育士は現場でどのように観察しているだろうか。その結

果が園児の一人ひとりの成育にどのように現れているかなど、子育ての根幹にかかわることを記載していただいた。その結果はたいへん関心のあるアンケートであったようで、殆どの方からの回答をいただいた。そして全体としては「今の親、そして親子関係はこれでよいだろうか」であり、書かれたことは「子どもの成育には、親子関係そして親の子育てについての考え方が大きくかかわっている」ということであった。ごく当然なことでも考えることではあるが、毎日子どもに接している保育の現場からだけに、みんなが今の親世代の社会の背景を考えて、真剣に取り組まなければならない問題であると改めて痛感したのである。私たちはいまは安易に次世代育成支援という言葉が使われているが、対象となる子ども達が現在どのような環境にあるかということを感じなければならぬ。

更に児童憲章にある「児童はよい環境のなかで育てられる」を認識して、家庭の子育てと保育所における集団保育が連携してよりよい「親育て、子育て」を目指さなければならないと思う。

最後に子育てのなかの親子について書かれた保育士のお話をとおとどけする。「いろいろ様々な親がいて、これが今の日本の姿だと思う。今は都会も田舎も変わらない。自分が仕事の休みの時は子どもと一緒に過ごしたいからといって、子どもも休ませて家で保育する感心な親もいれば、自分は休みだから子どもは園に延長保育時間までおいて、遊びまわる親もいる。自分はきれいに着飾り子どもは汚れた洋服のまま園に出すような子育てのできていない親がふえてきている。子ども達が一番可哀そう。親保育も大切な時代」

「今は生活リズムが子ども中心でなく親中心。子どもが親に振り回されているような感じを受ける、基本的な生活習慣が身につかず、人と人との関わり方の下手な子がふえている」「母が悪いのではなく、子育ての専門家と言われる方々による一般的な発言の中に、もう少し真の子どもの姿を伝える努力をして欲しい」という苦言もあった。